

# 埼玉の夜明け

巻号 43  
第3号  
通算135号

団 区 会  
教 区 員  
キ 区 委  
リ 区 会  
東 社  
日 本 社

## 埼玉地区2・11集会講演

### 資料から見る戦時下の教会

東京教区東駒形教会牧師 戒能 信生



(埼玉地区の二・一一集会にお招きを受け、「資料から見る戦時下の教会」と題してお話しました。当日配布した資料をもとにして、私の知る戦時下の教団や諸教会のある断面をご紹介したので、その内容を『さいたまの夜明け』に書くように依頼されましたが、資料だけで相当の量に及びますし、到底全部をこの紙面にまとめることはできません。そこで、

講演の最期にお話ししたこれからの教会の課題の部分原稿から抜き出して寄稿させて頂くことにします。

資料から見る戦時下の教会の実態を瞥見して、つくづく考えさせられます。日本の教会は、いつ頃から、そしてどうしてこんなに国家に対して追従するようになり、戦時体制にどっぷり漬かってしまったようになってしまったのでしょうか。伝えられるところによれば、明治の初期には、内村鑑三、植村正久、柏木義円といった指導者たちが、「社会の木鐸」として堂々と論陣を張り、古い儒教的・

封建的な社会慣習と対決し、また明治政府に対しても対峙的姿勢を保持していたのではなかったのでしょうか。それがどうして、今日ご紹介したように、戦時下の教会のような惨憺たる結果になってしまったのでしょうか。

経済学者である隅谷三喜男先生は、ご自身がクリスチャンであったこともあり、つぶさに戦時下の教会の実態を経験して、いつ頃からこの国の教会が、国家や政府に対する対峙の意識や関係を失ったのかを辿り直しています。それが敗戦直後に書かれた『近代日本の形成とキリスト教』です。そこには、明治二〇年代の半ばに、明治政府の欧化政策がナショナルリズムの方向に振れると、教会はその打撃を受けて教勢が振るわず困苦する様子が紹介されています。そして、この小さな書物の最後で、明治中期以降、国家に対して対峙の関係を失っていった日本の教会の姿を整理していますが、それを私なりに要約すると次のように言えると思います。

「しかし明治二〇年代半ばに至って、明治維新体制が政府において確立され始めると、一種の反

動の中でキリスト教は停滞する。そして日清・日露戦争を経て確立されていった絶対主義天皇制のもとで、明治初期にはもち得ていた

天皇制や資本主義体制への対峙の姿勢を失っていき、むしろ妥協や屈従、そして包摂への過程を辿り始める。すなわち、内村鑑三に典型されるように『信仰を真に人格的なものとして個々人の中に確立しようとした』人々、安部磯雄たちのように、『キリスト教の新しい展開を社会運動との結合に見出す』とする人々、そして植村正久に代表されるように、『教会を社会から必要な限り切り離し、教会の中に閉じこめることによって、信仰の純粹性を教会を中心として保持しようとした』人々である。これらの人々は時局に迎合せず、それぞれに信仰の正しい発展を企図した点において意味をもっているが、同時にそれぞれに欠陥を内包していた。すなわち『個人主義者は信仰の社会性』福音の具体性の把握において不十分であり、社会主義者は『福音自体の把握に欠陥をもち、大部分が信仰に躓いてしまい』、教会主義者は『教会の社会に対する責任において十分

ではなかった。ここにその後の日本キリスト教界の悲劇が存する』と総括される。」(『隅谷三喜男著作集』第8巻解説)

この隅谷先生の仮説は、明治期のキリスト教指導者たちの思想的な軌跡を追う中で、ある種の理論モデルとして提出されています。つまり思想史、あるいは社会思想史としての仮説です。私はこの隅谷仮説を、各個教会のそれぞれの苦闘の中で検証しようとして来ましたが。すなわち、内村鑑三や安部磯雄、植村正久といった知識人たち、あるいはキリスト教思想家たちの問題としてだけではなく、各地の教会の実際において、それがどこまで当てはまるのかを検証してみようとしています。

最近『高崎教会一二〇年史』が刊行されました。その明治期の教勢統計を眺めていて、ハッとさせられたことがあります。高崎教会は一八八三年(明治一七年)に創立されています。明治期の群馬県下のキリスト教は、東京や横浜などの都市部よりもキリスト教人口の割合が高かったのですが、創立当初毎年のように五〇名前後の受洗者が続出し、瞬く間に教会員数

三〇〇名を超える教会が成立します。ところが、その高崎教会で、明治二四年の受洗者一名、二四年〇名、二五年〇名、二六年〇名、二七年〇名、二八年一名、二九年以降しばらく統計記録なしという状態に陥るのです。それまでの教勢がうなぎ登りでありましたから、明治二四年以降の急激な教勢の停滞は見るも無残です。礼拝出席者は激減し、教会財政は危機的

になります。

これと同じことは、同じ群馬地区の原市教会においても、また甘楽教会においても共通して見られます。これはなにも群馬県のことだけでなく、全国的な傾向でした。この明治二三年、二四年に何があつたかという点、「教育勸語」の発布と内村鑑三不敬事件でありました。つまり明治政府の欧化政策が、明治憲法の発布と国会開設

と共に国家主義に振れた時期にあたります。そしてその後、日清・日露戦争を経て、この国に絶対主義天皇制が確立すると共に、キリスト教会の国家や国策に対する対峙・対決の姿勢は次第に失われていくのです。

明治初期、東京の浅草に日本基督教会明星教会という教会があり、小川義綏牧師によって創立され、宣教師タムソンの協力に

よって順調に教勢を伸ばしてしました。しかしやはり明治二〇年代半ばの時期になると、教勢が上がらず、教会財政は困難を増し、その結果様々な内部の混乱が生じます。その事情を中会宛の「教情報告」から読み取ってみますと、

明治二三年報告「・・・教内の困難。会員中多くは商工業者にして、日々世事に奔走し、伝道のために働くものなく、且つ昨年来の不景気により集金上に影響来たし困難せり。」

明治二四年報告「従来、不信仰にして集会せざるもの多数を放逐し、或いは自ら退会したるものこれあり、近來集金高減少し為めに教会維持困難にあり、自今維持の方法計画中なり。」

明治二八年報告「会計。近來諸物価騰貴により会費未納者多数にして最も困難を来たせり。」

このような困難の中で、伝道方針をめぐって教会は分裂し、さらに日露戦争直後の民衆暴動で礼拝堂が破壊され、その後も関東大震災による甚大な被害に遭い、さらに東京大空襲によって礼拝堂は灰燼に帰し、ついに歴史を誇る明星教会は、小石川教会と合同して小

石川明星教会となって浅草の地を離れることになりました。

先ほど戦時下のキリスト教主義学校において、その経営の困難が「軍用機献納運動」への突出した協力へと繋がったことを紹介しました。教会もまた例外ではありません。教会もまた例外ではありません。明治中期以降、絶対主義天皇制が確立されていく中で、教会は教勢の不振と財政困難の中で、次第にその対峙・対峙の姿勢を失っていったのです。その無残な帰結が第二次世界大戦下の教会の実態であつたと考えると、二〇一三年現在の私たちの教会の使命と課題はもはや明らかであると云わなければなりません。教勢の停滞、教会財政の困難は深刻で、私たちの教会の実態を内側から突きます。しかしそのような困難の中で、私たちがイエス・キリストの福音を水増ししてこの世の支配的価値観に合わせようとすることは許されたいはすです。また教会の内側に閉じこもって、自己の都合と利益を追い求めることも許されたいはすです。その意味で「世のためにある教会」としての使命を改めて追い求めなくてはならないと考えさせられています。

主張

昨年の衆議員選挙は、大方の予想通り、自民党が第一党になった。年末の新聞に「二〇一

二年、隣国との仲はこじれ、民主党は愛想を尽かされた。国防軍を公約に掲げた自民党が政権に戻って、衆院の九割が改憲派となった。原発や公共事業の方針転換を見るにつけ、車窓からもそれと分かる急カーブである」とあり、呆れてしまった。

民主党をかばうつもりはないが、私に言わせれば「過去に散々愛想を尽かされた自民党が恥ずかしげもなく政権に戻った。こんな日本に愛想を尽かされた」となるのではないか。

主張したいことは沢山あるが、何んと言っても原発のことを述べたい。そもそも、自民党の安倍首相は「原発ゼロは無責任」と主張していた。日本人はとかく「のど元過ぎれば熱さを忘れる」と言われ、チェルノブイリと言うある意味で良い見

本があつたのに、安全だ、安全だ」と無理やり地元を納得させ、「原発推進ありき」で規制を甘くし、電力業界の利益保護を優先させてきたのは自民党ではなかったか。

今回の福島原発事故がなかったら、ほとんどの国民は地震国で、狭まい国土に五十ヶ所以上の原発が作られていたことを知ることはなかったのではないか。人間が完全に放射能をコントロールすることはできないことだし、放射能だけでなく、燃料として使った後の廃棄物を処理する場所も決めずに、都合の悪いことは先延ばしして、どんどん増設しようと考えている。子供でも理解できる「原発ゼロ」をどうしてはつきり言えないのか。今後は作らない、今あるものは早急に止める。止めると言っても元の状態にするには何十年どころか何百年先であることを考えるべきである。

今、「原発を拒み続けた和歌山の記録」という本を読んでいる。是非他の県も見做って欲しい。



## 書評

## 『戦争と罪責』

野田正彰 著 (岩波書店)

元埼玉大通り教会牧師

遠藤 富寿

本書は「世界」という雑誌に九年二月号から十七回にわたって連載されたものを単行本にまとめたものです。

著者は一九四四年生まれの精神科医で、専攻は比較文化精神医学です。このような視点で十五年戦争（一九三一―四五年）で表面化した日本人の精神を、戦争に参加した多くの証人への面接で解き明かし、現代のわたしたちの心の欠落と抑圧を問っています。戦場で目を奪うような残虐な行為（略奪、暴行、放火、誘拐、虐殺など）をしながらも、（一）天皇中心の軍国主義で教育され国民としての義務を果たしたまでだ。（二）仕方なかったのだ。（三）いかなる事情があっても実際に手を下したのは自分なのだ。等々さまざま弁明があります。一方、戦争は人間を獣にする、戦争になればどこの国でも同じようなことをしている、と戦争を一般化しがちなわたしたちがいます。そこでの過ち

は、起こった個々の事例を検討もしないで一般化の中で事実を忘却しようという意図を隠していることとです。著者は元兵士への丁寧な聞き取りで彼らの内面の深みに激むものを浮き立たせようとしています。

中国で捕虜となった日本人兵士の多くは、シベリアに送られ過酷な労働を課せられ、取調べの結果、中国で裁かれるべき兵士は中国へ送還されました。中国の撫順戦犯管理所での捕虜の扱いに元兵士たちは大変驚いています。かつて自分たちが中国人捕虜に対して行った物的扱いとは全く異なり、獄吏たちが大変親切であり、彼らはコーリヤンを食べながら捕虜には白米を供していました。獄吏の中には親族を虐殺された人もいたと思います。捕虜に対して罵声を浴びせることが全くなかったことと、坦白（タンバイ、告白のこと）と認罪が始まります。それは自己弁護の告白↓罪状の羅列↓責任回避（自己の残虐行為を出来事として整理し、知的に反省はするが感情は戻っていない）↓感情を伴った罪責と深まってゆきます。このような経過を経て釈放された兵士たちが日本に帰国すると、共

産主義に洗脳された非国民として警察の尾行が付くという始末でした。

私たちの周囲には中国人大量殺戮、南京虐殺、慰安婦問題等々はなかったと豪語する人々がいます。国会内でも憲法九条改悪の声が目増しに大きくなっています。わたしたち日本人は本当に過去の歴史を忘却したのでしょうか。現実に対し批判的眼力を持ち、自らの行為を正面から見つめ、被害者の現実には思いを巡らす感性をわたしたちは失っているのではないかと問い返すことを求めているのが本書です。

## 新生生前診断と信仰

本庄教会 洪沢 久

全国キリスト教障害者団体協議会は年に一度、加盟団体の地元で総会・研修会を持っている。プログラムには主題講演などに加えて会員の証し（証し）が盛り込まれる。

私は長い間この会の代表者をしてきたのだが、友が障害を通じて主へ導かれたことを感謝し、主に必要とされていることを喜んでいく姿を幾度となく証しの場で見て

きた。

さて、アメリカで新しい遺伝子検査が始まったことに伴い、日本への導入の是非が先日話題になっている。従来の出生前診断に比べ、新診断法は精度、母体への影響、診断確定の時間などで画期的とも言えるものだという。

一方、関係者によれば出生前診断の結果、胎児が障害を持つことが何われるとその多くが中絶されることである。そこで今回の新診断法の導入への慎重論が湧きあがっているのだが、早期の実施を望む声があるともマスコミは伝えている。

こうした現状を前にして、障害を持つ信仰者として、いのちの存在と神の御心について新たに問いなおしてみたいと思う。

一 いのちは神からの賜物  
出生に関わる技術が発達した結果、人は生命は操作できるものだと思うまでになった。

だが、聖書は告げる。「見よ、子らは主からいたたく嗣業。胎の実りは報い」（詩篇一二七・三）。「胎児であったわたしをあなたは目で見ておられた。わたしの日々はあなたの書にすべて記されている。まだその一日も造られないうちから」（詩篇139・16）。

障害を持ついのちも例外ではない。いのちは神からのいただきものなのである。

二 人はみな必要とされている  
神は障害を持つ人も持たない人も必要とされていると聖書は語る。人間の体において目や鼻などの各部分がそれぞれに必要なように、人は皆必要なものとして誕生させられるのだ（コリントの信徒への手紙一12・17）。

障害などの一見弱さ、不必要と思われるところにこそ神の恵みの窓が開かれているのかも知れない。

三 神の用意した旅を歩む

人工妊娠中絶の正当性を裏付ける根拠に障害を持って生まれてくる子どもがこの世での生きる困難さがよく挙げられる。

しかし、この思いは人がそのいのちの行く先を神様を超えて先取りしていることではないのか。神様の演出なさる人生という旅のドラマを人間の知恵で勝手に変更してはならない。

新生生前診断の導入にあたって神の心を新たに問いなおしてみたいものだ。

（全国キリスト教障害者団体協議会会長）

各教会の社会活動

△アジア学院を訪ねて▽

所沢みくに教会 最上久美子

去る七月一七日(火)、所沢みくに教会の九名の者が、アジア学院を訪ねました。前から、学院のアジアアフリカなどの農村指導者養成のお働きを見聞して...

またみくに教会では、毎年アジア学院生のホームステイを受け入れ、教会全体で交流を持って...

訪問の前日、教区宣教協議会で学院副校長の荒川朋子さんの講演を聴くことができました。安心安全な食べ物作りを指導してきた学院が、原発事故による放射能汚染のためにどんなに苦しみ悩んだか、そして「那須を希望の砦にする」との決意のもとに、地域と共に歩む道を選ばれたことをお聴きし、ますます訪問が期待に満ちたものとなりました。

あいにく、当日は学生たちが地域の農家での研修で不在でした。しかし、理事長(校長)の大津健一先生と荒川さんの笑顔に迎えら



れ、学院の現在の働きについて詳しくお話を伺うことができました。特に地域の農家の方々と共に食品の放射能測定をし、官公庁の発表に頼らず、自分たちの目で確かめて自信をもって農業を進められるように支援しておられることに、感心しました。と同時に、それだけ農家の方々の苦しみが深いことも感じさせられました。

お昼は学院の食堂にて、アジア風の食事をいただきました。この食堂で、いろいろの国の留学生たちがワイワイ楽しく食事をしてい

るのだろうと想像しながら。その後、学院の建物、畑、家や動物小屋など、先生方のご案内で見学して回りました。豚の大きさに驚いたり、畑の有効な使い方に関心したり、大変な暑さの中でしたが、楽しく見させていただきました。

した。

最後に食品の放射能測定をするべくレルセンターも見学させていただきました。地域の方がボランティアで毎日、測定の指導に当たって

自分の作物の測定に気軽に来られ、判断の基準にしておられる様子などを伺いました。原発事故のために大きな問題を抱え、苦勞してこられたアジア学院ですが、現在もまた「共に生きるため」に地域の

人々と悩みを共有しつつ、地域の光として、進む道を積極的に示しておられると思いました。

学院のこの働きが神様に祝され、ここで働くスタッフや学生たちの健康が守られ、アジアアフリカによい実を結んでいきますようにと、皆で祈り家路につきました。

社会委員会報告

●各教会の社会活動(活動委員会「十月」に報告された中から)

□大宮教会

●大震災救援ボランティア(仙台・二回計八名) ●ワークキャンプ(川越キングスガーデン・三回計四十一名) 草取り、おむつたたみ等

●八月「平和を語り合う会」テーマ「沖縄を考える」

□所沢みくに教会

●七月「アジア学院見学会」参加九

名 ●原発被災された天下牧師(小高教会)と懇談会 ●八月に成田小二郎氏(カトリック平和委員会) 招いて「核について」勉強会。

□埼玉和光教会

●山谷兄弟の家伝道所・まりあ食堂への支援と協力(年二回お米、毛布等の献品と献金) ●和光市中心障がい児・者を守る会への支援と協力 ●八月に西川重則氏を招いて主日礼拝と憲法学習会を行う。

□和戸教会

●八月「太平洋戦争へ至る道」ビデオ観賞、懇談 ●九月「原子力発電から脱却を求めめる教区声明」を資料に懇談 ●壮年会で「埼玉の夜明け」復刻版を全員が購入し、例会で活用している。

□桶川伝道所

●二・一一集会、八・一五集会に参加した牧師や伝道所の社会委員が持ち帰り、後日報告し、分かち合いの時を持つ。

□本庄教会

●バザーで「アムネステー」の出版と広報活動。収益の一部を大震災救援募金、市内福祉団体、アムネステーに寄付。 ●「障害者週間」や「キリスト教教育週間」を覚え折りと献金。

□川口教会

●バザー収益金より一部を大震災救援募金 ●古切手収集

□行田教会

●「戦責告白礼拝」部落解放祈りの礼拝」として礼拝をもつ。 ●「東日本大震災救済」現地奉仕

□北鴻巣集会所

●「憲法九条の会の学習会」や「大震災についての講演会」等に参加して良い学びとなっている。

◎第四回社会委員会

日時：一月三日(日) 一五時三〇分～一八時三〇分 出席：六名 欠席：一名 場所：川口教会

開会礼拝：本間一秀牧師 一、前回委員会の議事録確認 二、二・一一集会の準備 ・講演題・委員の役割分担等について 三、小委員会報告 四、次年度の方針・組織

◎信教の自由と平和を求めめる二・一一集会、(講演会・懇談会) 日時：二月一日(月・休日) 午前一〇時～午後一時 場所：大宮教会

講演：「資料に見る戦時下の教会」戒能牧師(東駒形教会) 参加者：八八名(三一教会)

編集後記

今回、各教会の「社会活動」報告を掲載しました。報告教会は少なかったですが、皆様の教会で参考、活用していただけると幸いです。(浅子)